〈研究短報〉

医療ニーズの高い在宅療養児の学校生活を支援する訪問看護師の役割の検討

岡部明子[*1]・石原孝子[*1]

Ⅰ．はじめに

医療ニーズの高い在宅療養児（以下、療養児）が就学する際には「学校における医療的ケアの実施」の問題が生じる。親の付き添いによる負担増大、教育機会の保障、医行為実施に伴う責任論などの観点から論じられ、先行研究では、特別支援学校への看護師配置による母親の生活の変化（西原ほか、2014）や、看護師と教員の連携による実施体制の構築の必要性が指摘されている（下川、2012；立松・市江、2008）。一方、通常学校の医療的ケアは、自治体の看護師配置による実践報告（清水、2010；清水、2011a；清水、2011b）はあるが、多くは母親の付き添いによる実施に依存しており（下川、2012；荒川・荒川、2012）、ケアと家事と育児に追われる母親の身体的・精神的負担が大きく、学校への訪問看護の拡充が求められている（古城ほか、2014）。しかし、通常学校における訪問看護師による医療的ケア実施の効果や課題に関する研究は見当たらない。そこで、訪問看護師の学校での医療的ケア実施経過を分析し、訪問看護師、療養児の母親の視点から訪問看護師の役割を検討することで制度化へ向けての基礎資料を得たいと考えた。

Ⅱ．目的

通常学校への訪問看護実施事例の訪問看護師と母親の判断と行動、思いを把握し、療養児の学校生活を支援する訪問看護師の役割を検討することを目的とした。

Ⅲ．方法

対象：2014年４月より首都圏Ａ市の助成を受け開始された療養児（６歳女児、二分脊椎症、車椅子移動、間欠的導尿）の通常学校における医療的ケア実施事業に携わった訪問看護ステーションの管理者（以下、訪問看護師）、および療養児の母親（以下、母親）。

調査期間：2014年８月～2015年２月

方法：訪問看護記録から事業開始までの経過を把握した。1時間程度の半構成的面接を開始後3か月時、10か月時に訪問看護ステーションおよび母親の自宅にて行い、許可を得てICレコーダーに録音した。調査内容は、訪問看護師には事業開始までの経過、各関係者との連携行動、学校での医療処置実施の実際と工夫、事業実施による変化について、母親には事業開始前後の生活時間、事業実施による生活と思いの変化について、であった。

分析方法：事業開始に至る経過、訪問看護師の判断と行動を時系列で整理し、母親の事業実施前後の生活時間を把握し、事業開始後の思いの変化を語りから要約し整理した。

倫理的配慮：対象者への研究目的、方法を文書と口頭で説明した。また、研究への協力は自由意思であり参加拒否や中断により不利益は生じないこと、面接はプライバシーが保たれる希望の場所で実施し、データは本研究の目的以外に使用せず、匿名化の上厳重に保管し、成果公表にあたり個人が特定されない表現とすることを文書と口頭にて説明後、研究参加への同意を書面にて得た。東海大学健康科学部倫理委員会の承認を得て実施した（申請番号14-16号）。

Ⅳ．結果及び考察

本事例は、療養児の通常学校就学に向け、母親が市教育支援担当部門へ相談し、保健所保健師を経て訪問看護事業所へ「通常学校への訪問看護」の検討が依頼された。訪問看護師は市の助成事業であることを踏まえ、教育行政関係者へ訪問看護制度の説明の機会を設けた。さらに関係機関によるカンファレンスでは、対象の状況、訪問時間と料金、看護内容、学校との役割分担、導尿実施の環境整備を確認し、訪問看護の契約書類を整えた。同時に、母親には自宅訪問を併用し家庭での生活を把握した

＊１　東海大学健康科学部看護学科

上で学校訪問を行う必要性について説明し理解を得た。訪問看護師は学校への訪問看護の実施前後にカンファレンスを重ね、支援ネットワーク構築の役割を果たしていたと考えられる。また、自宅への訪問看護を提案した背景に、学校生活場面で成長発達の確認をしながら、自宅でセルフケア確立に向けての指導助言を行う必要性を判断していたと考えられる。一方、母親は通常学校就学の希望を発信し主体的に関係者へ対応しており、訪問看護活用により生じるまとまった時間を家庭（他のきょうだい児への関わり）と仕事に振り分け、帰宅後の療養児に濃密に関われることに満足感を抱いていた。医療ニーズの高い療養児の学校生活支援に際し、セルフケアの向上、家族の生活の充実を目指した視点の重要性が示唆された。

本研究は2014年度健康科学部特別研究費の助成を受け実施し、研究成果の一部を第19回日本在宅ケア学会学術集会にて発表した。

参考文献

荒川哲郎・荒川真人（2012）：地域の通常学校で医療的ケアを要する子どもが学ぶ意味，三重大学教育学部研究紀要，63，371-377.

古城恵子・吉田由美・糸井志津乃（2014）：二分脊椎症で導尿の必要な子どもをもつ母親の支えに関する思い，家族看護学研究，19（2），126-149.

西原みゆき・服部淳子・山口桂子（2014）：障害のある子どもの就学がもたらす母親の生活の変化，家族看護学研究，19（2），101-113.

清水史恵（2010）：通常学校に通学する医療的ケアを要する子どもをケアする看護師と学校教職員の協働の実態―養護教諭との協働に焦点をあてて―，千里金蘭大学紀要，7，57-64.

清水史恵（2011a）：通常学校で医療的ケアを要する子どもをケアする看護師と養護教諭との協働―養護教諭からみた実態と認識―，千里金蘭大学紀要，8，104-114.

清水史恵（2011b）：通常学校において医療的ケアを要する子どもをケアする看護師が認識している教諭との協働，日本小児看護学会誌，20（1），55-61.

下川和洋（2012）：学校教育における医療的ケアの到達点と課題，障害者問題研究，40（2），36-43.

立松生陽・市江和子（2009）：障害児（者）と家族における医療的ケアに関する研究動向と課題の文献検討，日本小児看護学会誌，18（3），46-51.